



ガラスの靴



凧香

店員が靴を見せると女は少し眺めた後、口許を緩ませた。

「戴くわ」

ある街の宝石店で数分店内のガラスケースを眺めた後、見るも美しい女は言った。指差したのは大きさが足の小指ほどありそうなダイヤモンド。

「かしこまりました」

いつもの風景。

この流れるようなブロードを持つ美貌の女は、毎日の様に贅沢の限りを尽くしている。けれど、これ程に派手な暮らしをしているのにも関わらず、華やかな社交界には決まって現れ羨望のまなざしを一身に受けているにも関わらず、家柄など彼女自身については誰もなにひとつ知らないのだった。女は宝石店を出ると、真っ直ぐ今度は靴屋に向かった。

扉を開けると、店員が急いで女に駆け寄る。

「この間頼んでおいた靴は出来ているかしら？」

「はい、こちらです」

「素敵だわ、包んでいただけませんか？」

「試着は宜しいですか」

「結構よ、私の足のサイズはわかっているでしょ」

「シンデレラサイズですね」

その言葉に女は軽く微笑んだ。

この街の靴屋の間で、女の足のサイズはシンデレラサイズと呼ばれている。

それは女の足が異常に小さく、靴が既製品では合わず常にオーダーメイドで作られていることによる。童話のシンデレラも彼女のガラスの靴は誰ひとり小さくて入らなかったが、彼女の靴もまた彼女以外には小さ過ぎて入らないに違いない。

いつしか、この足の大きさだったり身分がわからなかったりといったことから、何処の誰かわからない美しい女は、社交界で「シンデレラ」と呼ばれるようになっていた。

人々は彼女を噂しあつたが、その中に真実はなにひとつなかった。

なかには、探りをいれようと、女に話しかける大胆な紳士もいたが、彼女の美しさの前では普段の話術も形無しだった。女の、潤んだ瞳に見詰められ、うっとりするような甘い声で話し掛けられると、どんな男でも失語症に陥ってしまうのだ。

「あなたがシンデレラ？」

その日も、ある資産家のパーティーで、女はいつもの様に男に話し掛けられた。

「ええ、そう言われているみたいね」

女は少し酒に酔っているのか、気怠そうに応えた。

「素敵だ。僕は君みたいな人を探していたんだ！」

男のオーバーな言い回しに、女は軽く笑みを浮かべた。

「あら、初対面でプロポーズかしら？」

女は男に興味を抱いた。

探ろうとしてきた男は星の数ほどいたが、ストリートにこんな台詞を吐く男は初めてだったのだ。

「いや、勘違いしないでくれよ。君を狙う他の幾多の男と一緒にされるなんて心外だな」そうして、大袈裟に笑い声を上げると、男はスーツの襟のあたりに片手を入れ、内側から写真を取り出した。「これ見てくれないか」

「素敵、ガラスの靴だわ」

写真を覗きこみ、女は声を上げた。

「そう、ガラスの靴。シンデレラだけが履けた例の靴だ」

「本当にシンデレラの靴なのかしら？」

「いや、ある有名な靴屋に作らせたものだ。知り合いの資産家の息子が、この靴を履けた人としか結婚しないってごねてるんだ。あまりに小さくて、合うお嬢さんなんかいる訳ないんだが……。たぶん、結婚したくないんだろうね」

男はそう一気に話すと、悪戯っ子の様な顔で女に笑いかけた。

「ものは相談なんだが、」

「私にその靴を履けと言う気かしら？」

「賢いね、お嬢さん！」

「一応、褒め言葉と受け取っておくわ。これも何かの縁だし、お受けしようかしら。そろそろ、独り身も寂しいし」

こうして、数日後、女は男と共に知り合いの資産家の屋敷に行くことになったのだった。

屋敷で現れた資産家の息子は、いかにも箱入りで頼りなさそうに見え女をがっかりさせたが、目の前にガラスの靴が現れた途端、女は眼の色を変えた。

「素敵……」

「では、履いて戴けますかな」

男が言った。恐らくこの屋敷の主人だろう。

この仕方の無い我が儘息子に付き合うなんて、余程威厳の無い父親ねと女は軽く思いながら、顔

いた。

女がひんやりと冷えたガラスの靴に滑らかな足を滑らすと、靴はまるで女だけを待っていたかのように簡単に受け入れた。

「あなたが……、そうか」

父親の男は信じられないかのように、女を見つめた。

「だから、言ったでしょう。彼女がそうだと」

パーティで話し掛けて来た男が言った。

「結婚式はいつになるのかしら？」

女は言った。

それに、男は楽しそうに言った。

「結婚は監獄だ。それでもいいのかい？」

「いまさら、何を言うの？ 誘ったのはあなたじゃないの」

女はからかうような男の物言いに腹を立てて言った。

「そうか……、そう言ってくれて有り難いよ。監獄に進んで行ってくれるなんてね」

そうして男はにやりと笑った。

「どういう…意味…」

「毎夜のように、街から金品を奪っては贅沢三昧。手掛かりは子供の様に小さな足だけ。やっと、見つけたよ。シンデレラ、君が行くのは本当の監獄だ。警部、これでハッピーエンドですね」

そうやって、男は年老いたもうひとりの男に目配せした。

【完】